

中屋スキー教室の思い出

第7期 榊 由之 (1959年卒業)

私がアメリカ科に在学していた昭和32-34年の頃は、中屋健一先生を囲んでのスキー合宿が開かれていた。「中屋スキー教室」については、既にどなたかがお書きになっているかも知れないが、私にとっても大変に貴重な思い出である。

中屋先生は、当時の文藝春秋社の池島信平社長のご懇意であったことから、志賀高原の高天ヶ原に1軒ぼつんと立っていた同社の山小屋を借用してスキー合宿が行われた。



(高天原の文春山小屋、風呂なく近くの山荘で貰い湯)

志賀高原には、現在では東京駅から新幹線と長野からの高速バスを乗り継げば3時間程度で行ける。しかし、当時は夜10時過ぎに上野駅発の夜行普通列車に乗って、翌日の未明に長野駅着。長野電鉄に乗り換えて湯田中に行き、そこからバスで丸池に行く。今では丸池から先は発哺、一の瀬、焼額、奥志賀、とスキー場が開発されており、冬でもバスが奥志賀迄頻繁に通っているが、当時はジャイアントコースのリフトはあったものの、その先は雪道を歩いて山小屋にたどり着いた。上野駅から山小屋まで10時間以上を要した。山小屋は東館山と西館山の間にあり、その先は焼額山等手つかずの自然が展開していた。



(雪解けの山小屋、周辺は水芭蕉の群生地)

中屋先生は当時東京女子大学でもアメリカ史を教えておられた関係で、合宿には女子学生も参加していた。山小屋での男子学生の役割は、ストーブの火を絶やさないように薪を運び込んで燃やすこと、バケツで雪を運んで来てお湯を沸すこと等であり、女性陣が、炊事を担当してくれた。中屋先生は女子学生の一人一人にニックネームをつけて呼ばれ、打ち解けた楽しい雰囲気であった。早い夕食の後は、先生を囲んでの団らんが続いた。アメリカの歴史的な出来事、その評価、各分野の人物評、エピソード等、教室では聞けない数々のお話を多岐に亘って伺うことが出来た。

スキーの実技も先生に手ほどきを受けた。先生は我々一団を傾斜地に連れて行って、それぞれのレベルに合わせて指導された。私はそれまで雪国とは無縁であった

ことから、この合宿がスキーの初体験であった。まず直滑降、次に足を八の字に開いての滑り、半制動回転と順を追っての指導を受けた。今はカービングスキーが主流でその操作もごく簡単であるが、当時のスキー用具は板が身長よりもはるかに長く、革靴を履きその先端を皮の厚いベルトで固定し、踵をワイヤーで締めていた。操作はカービングよりはるかに難しく、荷重とか、重心の上下移動とかのテクニックを要した。先生に教えて頂いたことで早くスキーの操作に慣れることが出来た。

山小屋でのスキー合宿を切り上げて帰るときに、熊の湯から、横手山、渋峠を越えて白根火山の脇を通り、万座温泉に降りるスキーツアーが行われた。今では熊の湯から渋峠迄はリフト等で繋がっており楽々と登って行けるが、当時は熊の湯の近くにリフトがあるのみで、その先は、専ら雪の中をラッセルして渋峠まで汗をかきかき登って行く必要があった。私はスキーを初めて履いた3日後にこのツアーに同行させられた。大変苦戦したが、無事に万座に着いたときはやったぞという感激を覚えた。素人に近い私のような初心者をベテラン向きのスキーツアーに連れて行くことは荒っぽいご指導だとも思われるが、自分のレベルよりも上を目指して挑戦させる先生の教育方針であったのかと感謝している。

私は文1から法学部に進む前に自由な学生生活を楽しみたいとの思いでアメリカ科に入ったが、幸いにもその目的を達することが出来た。中屋スキー教室に参加したこと等が契機となって、スキーと山登りが私の生涯を通じての趣味となった。加齢とともに脚力、バランス力がかなり落ちて来たが、今でも年相応な山歩きとスキーを楽しんでいる。